

◎兩脛骨上部ノ「ガングリヨン」贅檢

會員 松本善次郎

Ganglion トハ韃鞛内粘液ノ謂ニシテ通常手脊及ヒ足背ニ現ハレ他部ニ發スルハ稀チリトス余曾テ順天堂醫院ニ於テ屢本症チ目撃セシモ多クハ手足ノ背面ニ生シタル者ニシテ只一回三十歳一男子ノ左脛骨上端ニ發シタル者ヲ見シコアリ當時佐藤博士モ亦此部ニ發スルノ稀有ナルヲ示サレタリ余ヤ頃日本病ノ兩側脛骨上端ニ發シ恰モ二個ノ膝蓋骨アリテ併列スルカ如キ奇觀ヲ呈ス

ル者ヲ實驗セリ左ニ其概畧ヲ記シ以テ同好諸君ニ頒  
ントス

患者、京都市三條住、神官服縫匠、大熊某、令廿四年

〔宗族歴〕父ハ四十五年ニノ衰弱ニ由リ、母ハ産後不明  
ノ疾病ヲ以テ逝ク一兄アリ胃疾患ニ罹ルト云フ遺傳ス  
ヘキ疾患アルヲ認メス

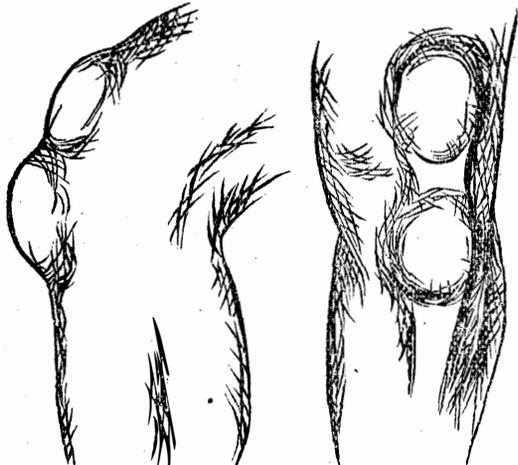
〔既往症〕患者生來虛弱ナリト雖幼年病、熱性病等ニ罹  
リシヲナシ十九年胃病ニ罹リ爾後毎年夏期ニ至レハ再  
發ス然レモ秋冷ト共ニ去ル其他時々寒胃ニ罹ル六七年  
前ヨリ常習衄血ヲ患ヒ又朝起眩暈ヲ發セシヲアリト云  
フ本病來歴、患者十九歳ノ時本業ニ就事シ茲ニ五年ヲ  
經過ス終日坐位ヲ取り屢神衣ノ邊縁ヲ繚轉膠着セサル  
ヘカラス其際ハ俯伏膝ヲ以テ蟬行シ脛骨上部ヲ以テ体  
重ヲ支ユルカ故ニ此部ニ刺戟ノ被ルノ甚キヤ知ルヘシ  
本年四月職業甚々繁忙匍行永日ニ亘ル偶脛骨上部ニ疼

痛ヲ感セシヲアルモ顧ルノ暇ナシ忍テ職ニ就ケリ然ル  
ニ同月下旬ニ至リ此部ニ疼痛腫起ヲ來シ三日ニシテ現  
今ノ大ニ達セリト云フ當時皮膚ノ發赤、灼熱、歩行障  
害、全身症候等ハ全ク欠如セル者ノ如シ

〔現症〕体格中等稍損害セラル皮膚蒼白、結膜、口唇ニ貧  
血ヲ呈シ皮下脂肪ニ乏シク筋肉發育稍不良ナリ、齒齦  
ハ其色帶褐赤色ニシテ暗紫色ノ小班ヲ見ル時々此部ヨ  
リ出血スルヲアリト云フ然レモ未タ全身皮膚及他ノ臟  
器ヨリ出血セシヲナシ(衄血ノ外)ト云フ身体各系統ニ  
於テ認ムヘキ變化ナシ

腫瘍ハ兩側脛骨上端ニ位シ其上緣膝蓋骨下端ヲ去ル  
三〇cm 縱橢圓形鵝卵大ニシテ彈力性腫物トナリテ現ハ  
レ分割性ニシテ皮膚ニ癒着セス表面平滑ニ凸凹ナシ皮  
膚ニ變色ナク壓痛、搏動ナシ僅ニ波動ヲ現ス之ヲ指間  
ニ狹ミ移動ヲ試ムルニ左右ニハ自在ナレモ上下ニハ能

ハス膝ヲ屈スレハ膝蓋腱上ニ占位スルヲ認ムニ腫瘍ハ  
 右大ニシテ左ノ者稍小ナリ甲ハ縱徑七、橫徑八、周圍十  
 七cmヲ算シ乙ハ各徑一cm小ナリ Porenneionニ由リテ  
 得タル物ハ赤黃色粘稠ノ液ニシテ直チニ凝固セリ(鏡  
 見ヲ得サリシト雖恐クハ出血性滲液ナラン)



其後患者ハ或醫  
 ニ就キ穿刺沃度  
 液注入義布綑帶  
 ノ治療ヲ受ケ十  
 日ノ后之ヲ脱シ  
 タルニ拇指頭大  
 ノ硬結ヲ殘シ毫  
 モ發熱ノ徵ナク  
 歩行ヲ妨ケスト  
 云フ

因記佐藤博士ハ本症ヲ治療スルニ常ニ腱刀ヲ以テ之  
 チ穿刺シ滲液ヲ壓出シタルノ后チ沃度保兒謨瓦稅ヲ  
 貼シ壓定綑帶ヲ施サル且謂ラク此法ニ依ル時ハ再三  
 再發スルコアリト雖反復ノ施術遂ニ消失スルヲ得ヘ  
 シ沃度液ノ注入、囊ノ抽出等古來慣用ノ法アリト雖  
 往々炎症、化膿ヲ招キ腱鞘間ニ癒着ヲ來シ爲ニ運動  
 チ妨クルノ患アリト、本患者ノ如キ未タ此害ヲ見サ  
 ル實ニ幸ナリト謂フヘシ

會員 飯森益太郎 速